

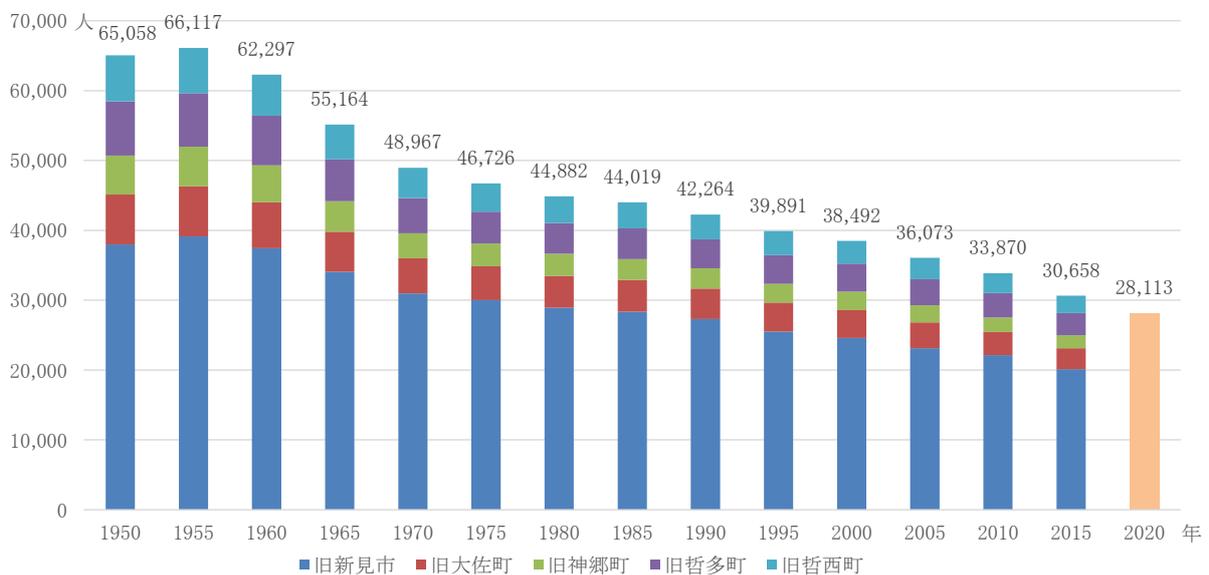
第1章 新見市の人口推移

新見市の人口は、1955年の国勢調査以降、減少が続いている。産業関連表を用いた分析に入る前に、この章では、地域経済の基盤となる人口について過去からの推移を概観する。

地区や年齢などの属性や、自然増減や社会増減など人口の変動要因について、人口推移の内訳をみていく。

1. 旧市町村別

図1-1 新見市の人口推移①（旧市町村別）



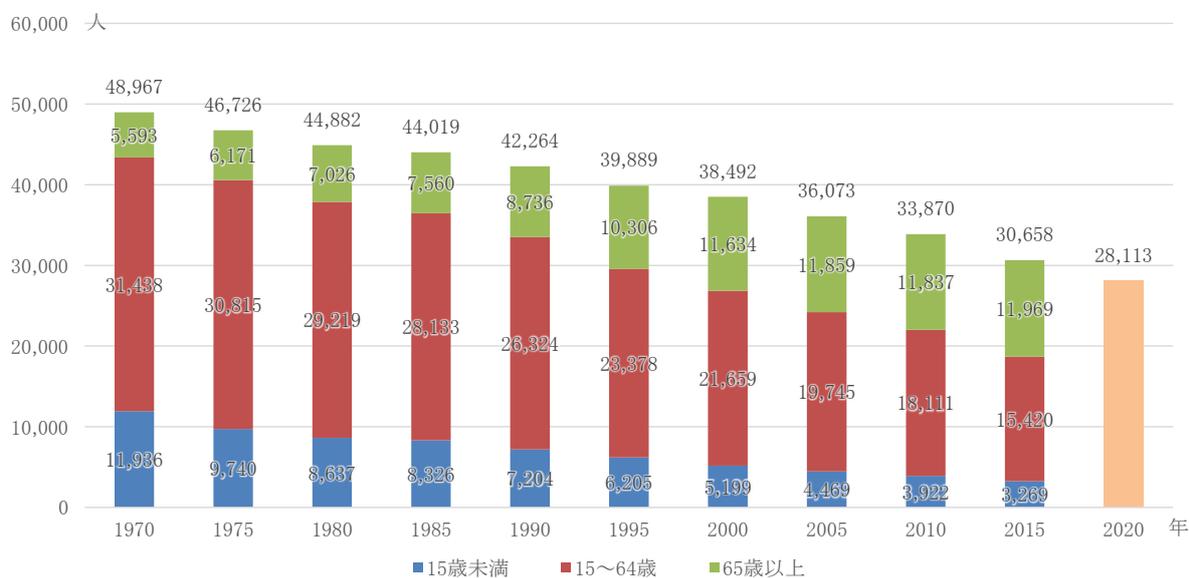
資料：総務省「国勢調査」、1950年～2020年

現在の新見市は、2005年3月に1市4町（新見市、大佐町、新郷町、哲多町、哲西町）が対等合併して生まれた。これらの旧市町村別に過去の人口推移をみると、どの市町もほぼ同じ傾向で推移している。

2. 年齢階層別

(1) 人口

図1 - 2 新見市の人口推移②（年齢3区分別）

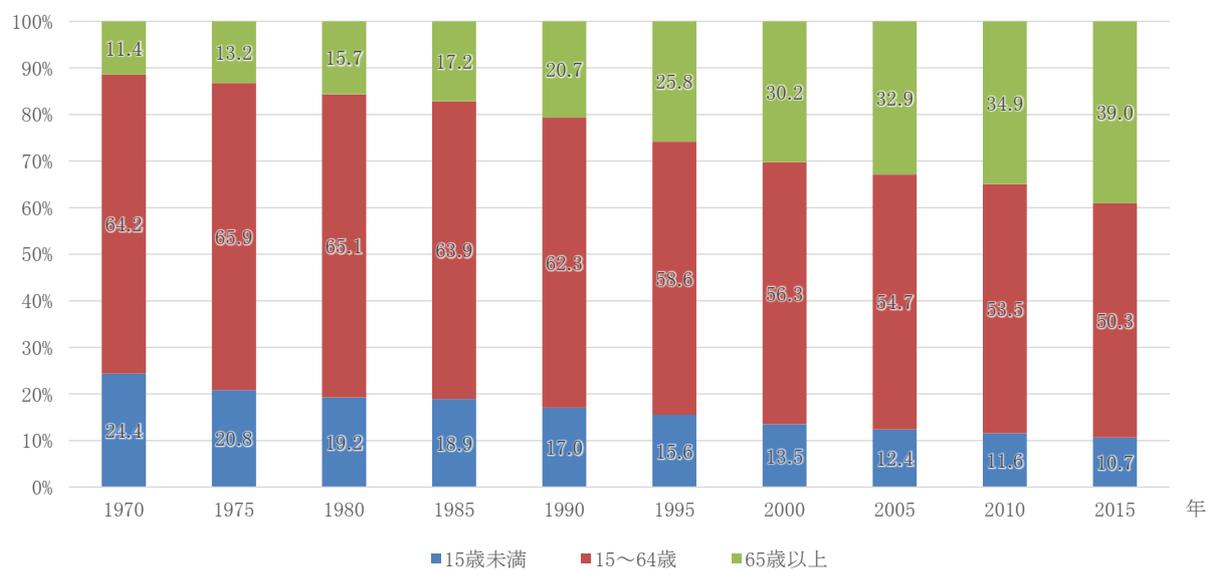


資料：総務省「国勢調査」、1970年～2020年

新見市の人口推移を年齢階層3区分（15歳未満、15～64歳、65歳以上）別にみると、15歳未満と15～64歳は減少傾向にある。その一方、65歳以上は増加傾向にある。

(2) 人口シェア

図1 - 3 新見市の人口推移③ (年齢3区分別シェア)

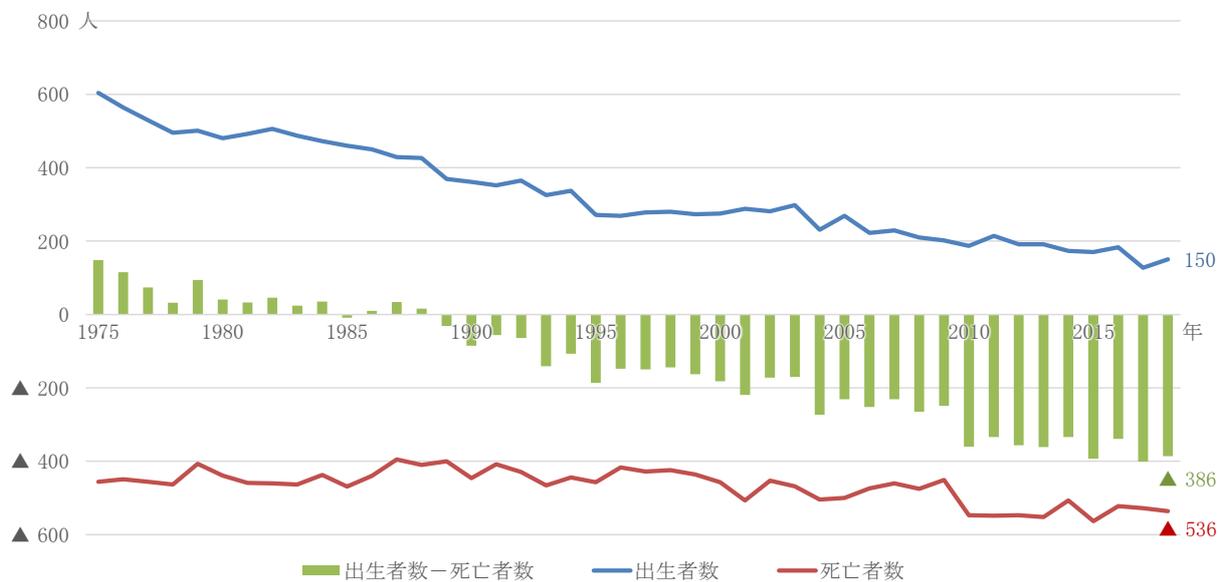


資料：総務省「国勢調査」、1970年～2015年

新見市の人口推移を年齢階層3区分（15歳未満、15～64歳、65歳以上）のシェア別にみると、65歳以上の人口が全体に占める割合は、過去30年間で倍増している。特に、1990年から2000年の10年間は増加が顕著で、約10ポイントの増加となっている。

3. 人口増減
 (3) 自然増減

図1 - 4 人口の増減要因① (自然増減)

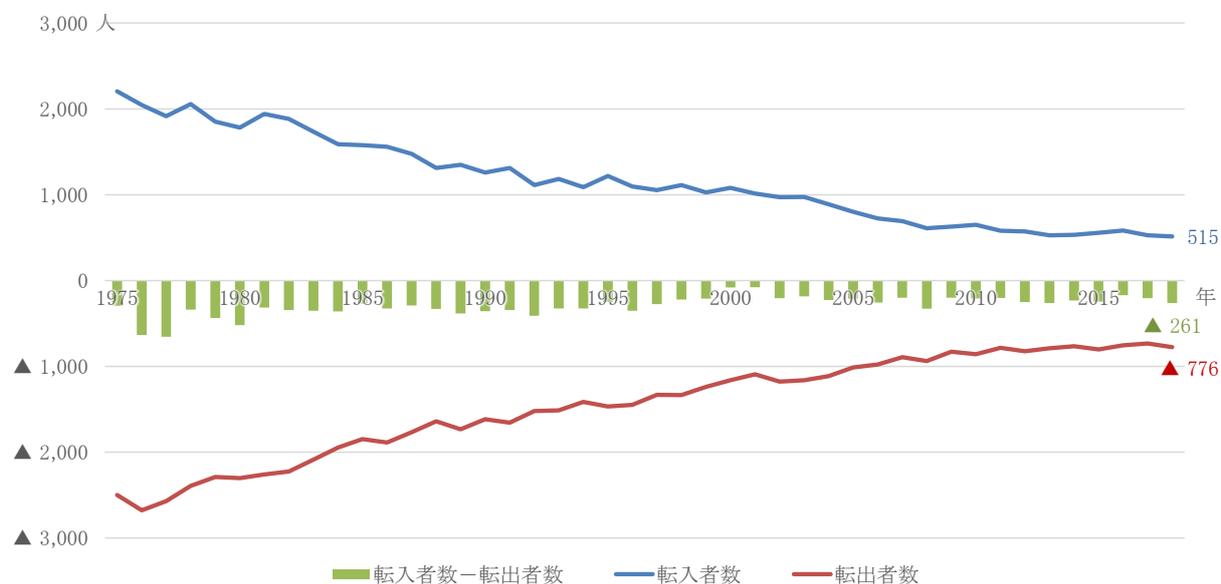


資料：厚生労働省「人口動態調査」、1975年～2018年

人口の増減要因のうち、自然増減(出生者数-死亡者数)についてみると、1985年から1990年にかけて増加から減少に転じている。因子別では出生者数の減少が顕著であり、特に1975年から1995年にかけて約600人から300人に半減している。

(4) 社会増減

図1 - 5 人口の増減要因② (社会増減)

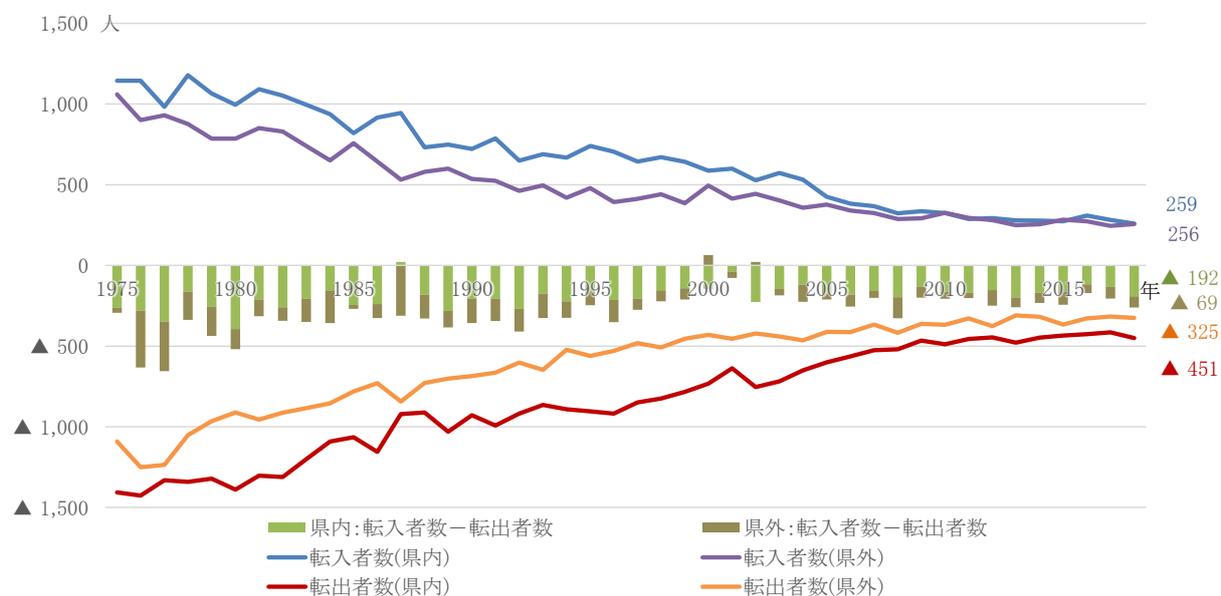


資料：厚生労働省「人口動態調査」、1975年～2018年

人口の増減要因のうち、社会増減（転入者数－転出者数）についてみると、減少傾向にあるものの減少幅は縮小している。因子別では転入者数、転出者数の双方が減少傾向にある。転入者数の減少は2000年代において顕著で、約1,000人から600人に減少している。

(5) 社会増減、県内外別

図1 - 6 人口の増減要因③ (社会増減、県内外別)

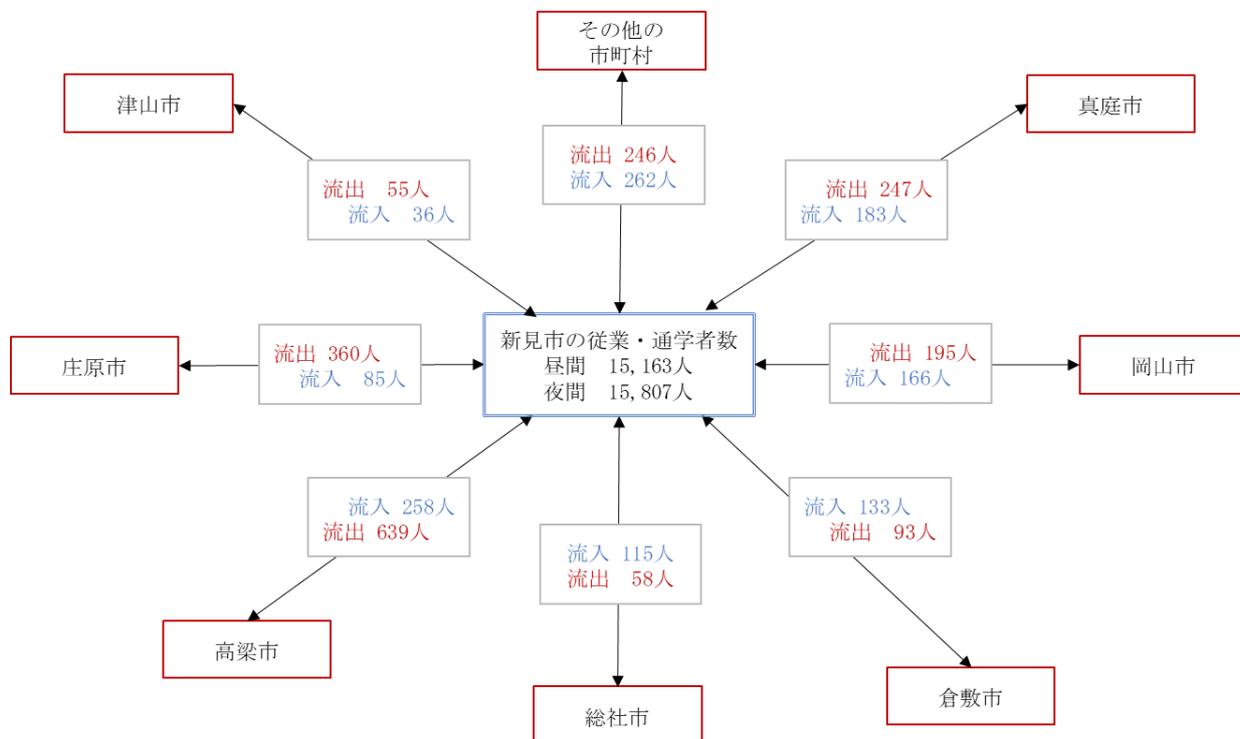


資料：厚生労働省「人口動態調査」、1975年～2018年

人口の増減要因のうち、社会増減（転入者数－転出者数）について、県内と県外に分けてみると、1975年以降は県内各市町村への転出超過が県外への転出超過を上回っている。大都市部の景気が悪化した2000年には、県外から転入超過となっている。

4. 昼間人口、夜間人口

図1 - 7 従業・通学者数



資料：総務省「国勢調査」、2015年

新見市の通勤・通学などによる日中の人口移動を、流入者数、流出者数の多い市町村別にみると、高梁市が双方とも最大である。高梁市以外の流入元では真庭市、岡山市、倉敷市が多い。一方、流出先では庄原市、真庭市、岡山市が多い。これら市町村の中で新見市に流入超過となっているのは、総社市と倉敷市であった。

こうした通勤・通学などによる日中の人口移動により、昼間人口は夜間（常住）人口に比べて644人減少する。